

愛されるのもお仕事ですかっ!!

プロローグ

華は自分の部屋でぼんやりと天井を見上げたまま、動けずにいた。ふわふわした明るい色の髪に指を絡め、無意識にぎゅっと引つ張る。

——こんなことが自分の身に起きるなんて……
重苦しいため息をつき、華はそっと目を閉じた。

華はつい最近、財産の大半を失った。お金を払い込んだ留学斡旋会社あつせんが倒産したうえ、そのお金を社長が持ち逃げしたのだ。夢ではない。インターネットのニュース記事になっているし、テレビでも『業界大手の留学者者が倒産し、社長が集めた費用を持ち逃げしました』なんてキャスターが言っていた。

——嘘だと思いたかった。会社も辞めることになってるのに……最悪だ……
この事実を知って半月ほど経つが、未だに立ち直れていない。そのくらい、華はショックを受けていた。

そもそもアメリカへの留学を決めたのは、数ヶ月ほど交際した恋人の武史たけしに振られたからなのだ。三年前に短大を卒業した華は、運良く一流企業であるインフラ系の専門商社、吉荻商事よしかぎに入社す

ることができた。営業事業部に配属され、事務職として多忙な毎日を送っていた華に声を掛けてきたのが、同じ部署の営業職である先輩、宮崎武史だった。

『一生懸命働いている伊東さんが好きなんです。だから俺と付き合ってください』
六つ年上の武史はそう言ってくれた。

華は比較的ほっそりと背が高く、栗色のウェーブを描いた髪に真っ白な肌、大きな茶色の目をしている。どちらかと言えば目立つ容姿をしているせいか、これまでも外見が好みだという理由で男性に声を掛けられたことはあった。だが生真面目な華は、中身に目を留めてくれない人とは付き合えないと思い、その申し出をお断りしてきたのだ。

華の中身を知って好きになった、と、そんなふうに通じてくれる人は初めてだった。しかも年上の人に——。華は彼を恋愛対象として考えたことはなかったものの、そう言ってもらえて単純に嬉しかったのだ。だから、その申し出にうなずいた。

お互い多忙でなかなか会えなかったけれど、彼はいつも『仕事を頑張る華が好きだ』と言ってくれた。

仕事一筋で、恋愛面は同僚の女子に先を越されてばかりだった華を武史は認めてくれたのだ。

社内恋愛で仕事に身が入っていないと思われると嫌だから周りには知られたくない、と武史に言われたため、華は絶対に周囲にバレないように気を使った。付き合っていた数ヶ月の間は、デートもそれほどできなかったけれど、彼とはうまくいっていると思っていた。ゆっくり関係を築いていけば素敵な恋人同士になれるに違いない、と。

なのに……そこから先のことは思い出したくない。

去年のクリスマス、なんとか時間をやりくりして会社を飛び出し、華は武史との待ち合わせ場所に駆けつけた。でも、そこには誰もいなかった。何時間待っても、何度メールや電話をしても返事はなく、結局武史はその場所に来なかったのだ。

事故にでも遭ったのだろうかとか心配していた華の気持ちは、翌日あっさり裏切られてしまった。

武史が、普通に会社に来ていたからだ。メールに返事はないし、電話にも出してくれない。なのに、武史は華を無視して普通に生活していたのだった。

何か事情があつて携帯を見ていないのかと思つたが、武史から向けられた冷たい眼差しにそうではないのだとさつた。

何か武史に嫌われるようなことでもしたのだろうかとか考えたものの、答えは出なかった。

一体何が起こつたのかわからなくて、その日の記憶はほとんどない。

だが、いつもどおり仕事は忙しかった。営業部づきの事務という仕事柄、数字を扱う重要な業務も多いので、いつまでも引きずってぼんやりしているわけにはいかなかった。

しばらく経つたある日、必死で明るく振る舞っていた華のところに、武史からのメールが届いた。

『本気にさせちゃってたらごめんね。ひどい振り方したほうが諦められるでしょ？』

ただそれだけ書かれたメール——まるで『真剣だったのはお前だけだ』とせせら笑うような振り方だった。

華は相当なショックを受けた。武史が『仕事を頑張っている華が好きだ』と言ってくれたのは嘘

で、からかわれただけだったのだ。その日から会社で武史の顔を見るたびに、彼の悪意のようなものを感じてしまつて、震え出すくらい華は傷ついていた。

——あのどん底から立ち直るために、夢だった留学をするつもり……だったんだけどな。

華は壁際にうずくまつたまま、膝の上に顔を伏せた。

気持ち重く沈んでいるが、明日は最終出勤日だ。

皆がわざわざ集まつて送別会を開いてくれるのだから、明日は笑顔で過ごさなければ。

笑顔で皆にお別れするのが、お世話になつた吉荻商事での最後の仕事だと思ふ。

残高が心細くなつてしまつた貯金と、新しい生活の心配は、その後からにしよう。

送別会の席には、華が思つたよりもたくさんの人たちが顔を出してくれた。

武史の姿が見えないことに内心ホツとしつつ、華は愛想笑いを振りまく。

「伊東さんは留學楽しみかい？」

お酒が入つて機嫌がいい部長の質問に、華は笑顔でうなずいた。本当は行かないのだが、今さら否定することもできない。

「はい！ 営業事務の仕事をしていたら、もつとしつかり英語の勉強をしたくなつちやつて」

単純な理由だが、部長は納得したようだ。にこにこしながらそうか、と言つて、ビール瓶を手に取ろうとしている。

「あ、私が……」

華は慌てて膝立ちになり、部長の空いたグラスに冷えたビールを注いだ。

席を見回すと、大量の案件を抱えて多忙なはずの営業マンの姿もちらほら見える。送別会だから気を使つて、時間をやりくりして顔を出してくれたのだろう。

「伊東さんは優秀だったから……俺としては残念だよ」

しみじみとそう言ってくれる部長に笑顔で会釈し、華はビール瓶を手に立ち上がった。

「部長、皆さんにご挨拶してきますね」

部長のそばを離れ、同僚にお礼を言つてビールを注いで回る間、華はずっと笑つていた。皆がいろいろと質問してくれたり、激励してくれたりする。同僚に恵まれたなと思いつつ、実はどん底であることを隠しているのが後ろめたくもあつた。

複雑な気分で主任のグループにお酌をしていた華は、名前を呼ばれて振り返る。

「伊東さん！ こっちこっち！ こっちおいでよ」

明るい声で呼んでくれたのは、営業マンの坂田だった。いかにもスポーツマン、といった感じの爽やかで男前な顔はすでに真っ赤に染まり、楽しそうに身体を揺らしている。

「あはは、きたきたー、さ、伊東さん、外山の隣にどうぞ」

坂田が指し示した隣には、営業部のエースである外山が座つていた。

端正な顔立ちに、サラリーマンらしくない鍛えられた身体の彼は、長身であることもあつて、どこにいてもひととき目立つ存在だ。どきん、と胸が高鳴つたが、慌ててそれを打ち消す。

ドキドキするのも無理はない。外山は入社した時から憧れの人なのである。優しく、時々若手

の華にも声を掛けてくれて、笑顔が素敵で……と、またしてもうつとりしかけていた華は、急いで自分を現実に戻した。

——外山さん、出張帰りなのに……来てくれたんだ。

いつも過密気味な外山のスケジュールを思い出して、嬉しくなってしまう。

今日の外山の予定には『五時まで京都で商談』と書かれていた。夕方の新幹線で京都から東京に戻ってきて、さらに送別会に参加するのは大変だったはずだ。最後だからとわざわざ顔を出してくれたのだろう。

華にとつて、外山は本当に憧れの先輩だった。いや、華にとつてだけではなく、女子社員や若手の営業マン、皆の憧れというほうが正しいかもしれない。

外山は中途採用で入社してきて今年で五年目だと聞いているが、営業成績は常にトップクラスだ。社長賞を三年連続で受賞している、凄腕営業マンなのだ。

上役の評価も非常に高く、来年度は同年代の中でいち早く主任に昇格するのではないかといわれている。外山がそれだけ優秀だということだろう。

「し、失礼します……」

ここに座つて、と床を叩く坂田にうなずいて、華は外山と坂田の間に腰を下ろした。すると、外山と目が合い、微笑みかけられる。整いすぎた笑顔に気恥ずかしくなり、華は会釈をしてうつむいた。やはり胸の鼓動は収まりそうにない。

昔からそうなのだ。彼のそばにいと緊張してしまつて苦しくなる。

その瞬間、外山の前に座つていた同じ営業事務の先輩、高野が華をじろりと睨みつけた。彼女は華が入社した当時からずっと、外山にご執心なのである。

——うつ、高野先輩ゴメンナサイ！ 今日で私は去りますので……！

そう思いつつ高野に向かってにつこり微笑んだ華の耳に、外山の低い声が飛び込んでくる。

「お疲れ様です、伊東さん。今日で最後だなんて寂しいな」

外山が、切れ長の目を細めてじつと華を見ている。やはり言葉につくせぬくらいカッコいい。

最後の出勤日に憧れの彼の隣に座れて良かった、と思ひ、華は心の中でこの席に呼んでくれた坂田に感謝した。

そんな時、華はふとこの場にいない武史のことを思い出す。

——そういえば、武史つては、外山さんをかなりライバル視してたよなあ……武史と外山さんつてチームは違うけど、歳は近いし。

武史はどうも外山が嫌いだったらしく、よく彼の悪口めいた愚痴を言っていた。

外山さんはそんなに悪い人じゃないと華が言った時、武史がムツとした表情を浮かべていたことまで、思い出してしまう。

しかし、こうして接していても、華には外山が武史が言っていたような男だとはどうしても思えない。あれは優秀な外山に対する、武史の嫉妬だったのだろうか。

——ううん、私にはもう関係ない。武史のことなんか思い出すのはやめよう。

華は武史の記憶を振りきって、明るい声で言った。

「外山さん、ありがとうございます。今日出張だったのに来てくださって。たしか燦光建設様の本社に行ってらっしゃいましたよね」

「ええ。伊東さんは相変わらず、営業担当者のスケジュールを完璧に把握していますね」

「いえ、そんな……外山さんにそう言っていただけで嬉しいです。ありがとうございます」

外山のグラスにビールを注ぎながら、華はお礼を言う。

営業部で一番歳が若い華は、電話応対をすることが多かった。

お客様が営業担当者あてに電話をかけてきた時、お待たせせずに取り次ぐのは当然だと思っ
てきた。だから、部内の皆のスケジュールは、なるべく朝一番に確認して、しっかりと把握するよう
にしているのだな、と感心する。

——クールに見えるけど優しいんだよなあ……外山さんは。会社の女の子たちが夢中になるの
もわかるよ。

『華ちゃん、外山さんにランチとか飲み会に誘われたら、絶対に私も呼んで！』

そう頼んできた他部署の女子も一人や二人ではない。華なりに頑張っ
て仲介したのだが、外山が彼女たちとそれ以上親しくなることはなかった。

もしかしたら外山は、同じ会社の女性にはあまり興味がないのかもしれない。

華は、すでに酔ってグニャグニャになっている坂田に水の入ったコップを手渡した。

「はい、坂田さんはお水飲んでくださいね」

「おー、伊東さんが利くねー！ アキラ君、伊東さんがくれたお水、もらっちゃうね……！」

完全にでき上がっている坂田はそう言っ
て、水をごくごくと飲み干した。

アキラ君、と下の名前と呼ばれた外山が、べろべろになっている坂田の様子に苦笑する。

「坂田はもう飲まないほうがいいんじゃないかな。今日は家まで送り返しませんからね」

「へーき、へーきっ」

坂田もまた、外山に次ぐ優秀な営業マンのだが、彼はとにかくお酒に弱い。接待の席では『飲
まない』と断言しているが、今日は仕事ではないのでつい口にしてしまったらしい。

「ねえねえ、伊東さん！ 伊東さんは外山のこと好き？」

べろべろに酔っ払った坂田に笑顔で尋ねられ、一瞬華の心臓がどくん、と音を立てた。動揺して
しまったことに慌てつつ、華は深々とわずいて答えた。

「えっ……はい、もちろんです」

「外山も好きだってー。良かったねー」

——な、何を言い出すの、坂田さん……

酔っぱらいの戯れ言とわかってはいるものの、心臓が口から飛び出しそうなくらいドキドキ鳴っ
ている。

しかし、この話の展開は不穏だ。そつと高野のほうを見てみると……案の定、彼女は不機嫌な顔
をしていた。

「あ、でも、私だけじゃなくて、皆外山さんには憧れてますよ。それより坂田さんはもつとお水飲

んでください」

華は、慌ててそう付け加え、空になった坂田のグラスをそっと取り上げてテーブルに戻し、新たに水の入ったグラスを置いた。

——高野先輩のご機嫌をなんとかしないと。

「先輩！ ビール飲みますか？」

明るい声でそう話しかけると、不機嫌な顔をしていた高野が我に返ったように、大人っぽい笑顔を浮かべた。

「あ、ありがとうございます、華ちゃん」

高野は、外山のことさえ絡まなければ、優しくして仕事もバリバリできる良い先輩なのである。恋人は人をちよっぴりおかしくしてしまうのかもしれない。

華が外山の隣を離れて高野にビールを注いでいる隙に、赤い顔の坂田が外山の肩に思い切り寄りかかった。二人は同期で仲が良いらしく、会社でも坂田が外山にじゃれついている場面はよく見かけるのだが、今日も例外ではない。

「どいてください。俺に寄りかかって寝ないでください。おい、寝るなって、坂田！」

坂田にへばりつかれた外山が、わざと怒ったように坂田を押しつける。そんなしぐさにも二人の仲の良さを感じて、華はなんだかおかしくなってしまった。

思わず笑い声を立てた時、坂田にもたれかかれたまま、外山が言った。

「あ、そうだ。伊東さんにおみやげがあるんです。退職祝いと思つて」

目を丸くする華の前で、外山がカバンから小さな箱を取り出した。

「客先からの帰り道に、趣味のいい雑貨屋があったので」

嬉しくてつい笑顔になりつつも、華はそつと高野の様子を横目でうかがう。

だがさすがの高野も、外山が華に退職祝いを渡すことにまではムツとしなかつたようだ。ホツとして、華は手を出して包みを受け取る。

「ありがとうございます。開けていいですか？」

外山がどうぞ、と言うのを確認し、華は和紙に包まれた箱を開けた。

中から出てきたのは、ヘアクリップだった。仕事中心いつも華が髪を留めていたのと同じ形だが、黒塗りで細やかな螺鈿の花が散らされている。

ひと目見ただけで心が弾んでしまうような美しい品だった。

「わあ、きれい！」

思わず笑顔になった華に、外山も嬉しそうな笑顔を返してくれた。

「気に入ってもらえたら良かったです。京都って、いいお店がたくさんありますよね」

手の中にしっくりと収まったヘアクリップは、かなり高価そうだ。もらつていいのだろうかと逡巡したが、遠慮しすぎるのも、忙しい中買つてきてくれた外山に悪い気がした。

「外山さん、本当にありがとうございます。大事に使います」

「おお、外山、勇気出してプレゼントか……プレゼント……俺にはないの？」

半分寝ている坂田が、外山に寄りかかったまま拗ねたように言う。

「坂田にはありません」

外山がわざとらしい冷たい声で答えた時、幹事の先輩が立ち上がって手を叩いた。

「はい皆さん、そろそろ時間です！　じゃあ最後に、本日の主役である伊東さんに挨拶をお願いしましょう。伊東さん、こっち来てください！」

皆の前に引つ張り出された華は、今の自分が浮かべられる最高の笑みで場を見渡す。

それから深々とお辞儀をし、ひととおり、今日のこの席を設けてもらったお礼と、会社への感謝の言葉を述べた。

「今まで本当にお世話になりました。この会社で学ばせていただいたことを活かして、これからは頑張りたいと思います」

その言葉で締めくくり、華はいつそう深々と頭を下げる。長いようで短い三年間だったな、と思った瞬間、少し涙が出そうになってしまった。

——本日に明日から頑張らなくちゃ。これからが正念場なんだから……

華の前途を幸せなものだと思い、笑顔で送り出してくれている皆を見ながら、華は懸命に明るい表情を保ち続けた。

三月の今の時期は、ちょうど送別会のシーズンだ。次の予約が立て込んでいるらしい店から追いつてられるようにして出て行くと、出入り口には同僚や上司たちの姿が見えた。

「皆、二次会に行こうか！」

酔っ払った部長が、ご機嫌でそんなことを言っている。華は曖昧な表情を浮かべたまま、そっと

人々の輪から一歩引いた。おじさまたちの二次会はとんでもない時間までカラオケに付き合わされるのだ。明日は土曜日なので、きつとエスカレーターするだろう。

——今日で皆と会うのも最後だし、一応今日の主賓だから行ったほうがいいんだろうけど、真夜中までタバコもくもくの中でカラオケするの嫌だなあ……かといって、暗いこと考えちゃうから家に帰るのも嫌だし。

悩む華の腕がつかまれたのは、その時だった。

自分の腕をつかんだ相手を見上げて、華はぎよつとする。

「と、外山さん……？」

しっ、というように指を立て、外山が切れ長の目を細めて囁く。

「伊東さん、よかつたら俺と一杯やりませんか？」

意外な人からの思わぬ申し出に、華は目を丸くした。びっくりしすぎて、咄嗟に答えが返せないが、もちろん外山に誘われて嫌な気はしない。彼は営業部で働く若手から見れば、本当に憧れの存在なのだ。

——どうしようかな……？　今日で退職だから、わざわざ声を掛けてくれたんだよね？

家に帰っても、暗い未来を思い悩んでうずくまる時間が待っているだけ。華の終電は十一時過ぎなので、それまでは誰かと過ごせるなら、もちろんそのほうがずっとありがたい。何より、こんな素敵な人と話せるのは今日で最後だ。

——最後、かあ……

なぜだか、不思議と切ないような苦しいような気持ちになる。そうだ、この人に会うのも今日で最後だから、お誘いに乗ろうかな。華はそう思い、外山の言葉にうなづく。

「はい、ありがとうございます」

外山がその答えに形の良い口元をほころばせ、ぐいと華の腕を引いた。

「それは良かった。じゃあこっそり抜けましょう、こっちは」

そう言つて外山は華の腕をつかんだまま、勝手知つたる足取りでビルの間の目立たない路地に入った。

背後から『坂田どいて！ 伊東さんがいなくなつたぞ、主役なのに！』なんていう声が聞こえてくる。酔つてご機嫌な上司の誰かが華のことを探しているらしい。しかも坂田は相当酔つて周囲を困らせているようだ。

「あの、外山さん。坂田さん、かなり酔つ払っちゃつてるみたいですけど」

「いいんです、アイツはああ見えても、意外と酔つていません」

「えつ、そ、そうなんですか……あの、じゃあ高野先輩は呼ばなくていいんですか？」

「ええ、今日は、俺と二人で」

その言葉に、華の胸がさらにドキドキする。

——二人……！ どうしよう。外山さんを私が独り占めしていいのかな。

華の腕を引いたまま、外山が足早に路地を抜けていく。

路地の先は大通りに通じていて、外山が手を上げるとすぐに流しのタクシーが停まつた。

——外山さんと二人でタクシー乗っちゃつた……

タクシーに揺られながら、華はそつと傍らかたわらの外山を見上げた。端正な横顔はいつも通り落ち着いていて、華がこの状況に胸を高鳴らせていることなど、気づいていない様子もない。

華の視線を感じたのか、外山は顔にかすかに笑みを浮かべた。

いかにも大人の男、という感じの表情で、華の鼓動がますます高まる。

——外山さんつて三十歳だつて。あれ？ 私のお兄ちゃんと同じ歳？ 全然違うなあ。ホント、いつも落ち着いているよね。

心の中で感心しつつ、華はなんだか照れくさくなって目を伏せる。

会社のエースである憧れの先輩と最後にお酒が飲めるなんて、素敵な思い出になりそうだ。

タクシーは、しばらく走つて都心にある有名なホテルの車寄せに滑り込んだ。インターネットのグルメ特集などで名前を見たことはあるが、とても一人で入れるような雰囲気ではない。

「このラウンジが気に入っているんですが、いかがですか」

タクシーを降りた外山にそう尋ねられ、華は思わず姿勢を正した。

「は、はい！ ここ、でいいです！」

緊張のあまり、妙なところで言葉が区切つてしまった。

ライトを反射して輝く大理石のタイルを踏みしめながら、華は外山の後をついて歩く。いつも仕立てのいいスーツをまとい、まっすぐに姿勢を正している外山の姿は、高級なホテルのロビーにしっかりと収まっている。このような場所に来ることに、慣れているように見えた。

緊張している華を振り返り、外山が笑顔で言った。

「景色がきれいで、好きなんです。ここ」

乗り込んだエレベーターの中にも見事な花が咲いてある。何から何まで、別世界のように感じる。軽いベルの音とともに、エレベーターは最上階に着いた。黒を基調とした薄暗いフロアはダウンライトでライティングされていて、高級感があふれている。

外山が慣れた様子で、入り口にいた店員に何かを告げた。きよるきよると店内を見回していた華は、外山に手招きされ慌てて彼の後を追う。

——すごいお店……！　こんなところ初めて来る。

案内された席は窓際だった。足元までの大きな窓一面に広がる光の海に華は目を奪われる。

外山にジャケットの袖を引っ張られ、華は我に返った。

「この席、気に入りました？」

「あつ、は、はいっ！」

夜景に見とれてしまい、外山に飲み物を選んでと言われていたのに気づかなかったようだ。けれど外山は何も言わず、優しく笑ってもう一度メニューを差し出してくれた。

外山には、今までに何度かランチに連れて行ってもらったことがある。たまたま外山が早く帰れる日に、誘われて飲みに行ったこともあった。

大概は高野が『一緒に行く』とついてくるか、『外山さんどこか行くなら私も誘ってね』と頼み込んで来る女子の誰かが一緒だったので、二人きりで……というのはなかったのだけれど。

だから、今日みたいに外山と二人きりで飲むとなると緊張する。

「今日は貴方と二人で飲めますね。嬉しいな」

外山が、華の考えていたことを見^み透^すかすように微笑む。

さすがに一流の営業マンはリップサービスが上手だ。華は恥ずかしくなり、外山の笑顔に曖^{あいまい}にうなずいた。妙に雰囲気の良い二人用に区切られた席に案内されたせいか、脈が異様に速^{はやい}くなる。

——バーって、こんなカップル席みたいなのがあるんだ……うつ、緊張が最高潮に……

「どうしたんですか」

「いえ……」

おそろくは真っ赤になっっているであろう顔を横に振り、華は慌ててドリンクのメニューを覗き込む。カクテルはあまり知らないの、知っている飲み物を探した。

——どうしよう、ビールでいいかな。いや、待って、こんなに雰囲気がいい場所だからいつもと違うものが飲みたいかも。

「これは？」

真剣に悩んでいる華の様子に気づいたのか、外山が長い指でメニューをさした。

フロアズン・ストロベリー・ダイキリと書いてある。

「シャーベットみたいなお酒です。ここのはイチゴが丸ごと入ってますよ」

華は目を輝かせる。生のイチゴが入ったお酒なんておいしそうだ。

「ありがとうございます。それにします！」

頬を染めたままそう答えると、外山が微笑んでうなずいた。

笑顔もスーツ姿も低い声も、何から何までカッコ良く決まりすぎなくらいだ。

——こんなイケメンが営業に来たら、話聞いちゃうよなあ。取引先のお姉さまなんて、外山さんご指名で電話かけてきたりするし。

そんなことを考えながら、華は必死に熱い顔を冷まそうと努力する。

「伊東さんは寮に住んでいるんですって？」

ふと思いついたように外山が尋ねてきた。

外山の言うとおり、華が住んでいるのは会社の寮だ。有給消化が終わる今月中に出て行かねばならない。新しい家を借りるには、敷金や家賃の他に引越し費用もかかる。寮には家電が備え付けであるが、それらも新しく買う必要があった。お金があまりない今、家賃の高い都内で家を借りるのは無理だ。

だから華は、田舎で家賃も安い実家の近くに帰ろうと考えていた。

華の実家は兼業農家で、両親と兄夫婦、それから二人の甥っ子が住んでいる。実家に戻ることも考えたが、兄の家族の邪魔になってしまうし、すでに華の部屋もないから難しいだろう。

だが、近所に住んでいれば母がお米と野菜くらいは分けてくれるだろうし、事情を話せば家電を買ってお金くらいは貸してくれそう。

もちろん、留学がダメになったと知られたらものすごく心配するだろうから、そのことは伏せて

おくつもりでいる。そもそもまだ戻ることさえ伝えていないのだ。

たとえ、戻るための適当な理由を見つけたところで『お見合してお嫁に行きなさい！』という、いつもの説教めいたお小言は避けられない。軽い頭痛を感じ、華はそつとこめかみを揉んだ。

それが一番の問題なのだ。お見合い結婚などしたくないというのに。

「アメリカの生活は楽しみでしょう。期間は半年でしたっけ？ 帰ってきたらまた一杯飲みましようか」

外山にそう言われ、華はうなずいていいのか悩んでしまう。

実際は留学には行けず、地元に逃げ帰るのだ。言葉を濁して華は答える。

「私、留学後は東京にはもう戻ってこないんです。実家近くに帰っちゃうので」

「……そうだったんですね」

虚を突かれたような表情で外山が言った。

何をそんなに驚いているのだろうと思っているところに、注文した飲み物が運ばれて来た。

シャーベット状の赤いお酒にカットしたイチゴがたくさん盛りつけてあり、ミントの葉が飾ってある。想像していたよりずっと素敵な飲み物だった。

「わ、素敵、おいしそう」

華は笑みを浮かべたまま、ちよつと首を傾げて外山に尋ねる。

「外山さんは何を頼まれたんですか」

「クイーンズ・ペックっていうカクテルですよ。飲んでみますか」

華はしばらく考えた末、そのお酒をひと口もらうことにした。

普段なら人のお酒を飲ませてもらうことはないのだけれど、憧れの外山と二人きりで非日常的な空間にいる、というシチュエーションで浮かれているのかもしれない。

「あ、おいしい。初めて飲みました」

ちよつと苦い後味だが、ワインのような味もする不思議なカクテルだった。

口の中がさっぱりする。

「伊東さんは、カクテルはあまり飲まないでしたっけ？」

「そんなことないですよ。ただこういうお店のカクテルって、飲んだことがなくて。本格的ですわね」

華はそう言つて、シャーベットの中に沈んだイチゴを、柄の長いスプーンですくつた。

ほんのりアルコールの染み込んだイチゴは得も言われぬおいしさだ。

にこにこしている華を、外山も柔らかな笑顔で見つめている。その表情はやっぱり大人っぽくて、華のドキドキが全く収まらない。

「留学後、ご実家近くに帰るといことは、地元がお好きなんですか？」

外山にそう聞かれ、華は首を振つた。

「……できれば東京に住みたかったですけどね」

思わず正直な自分の気持ちを答えていた。

高校までの友達も皆、地元を出て働いたり嫁いだりしているし、買い物をするにも、大きな街へ

は車で一時間以上かかる。華にとつて、実家のそばはあまり魅力的な場所ではない。

カクテルに沈んだイチゴを食べ終え、華は今度はシャーベット状になっているお酒をすくつた。

甘いアルコールが口の中でとろりと溶けて、これまたたまらなくおいしい。

さすがは外山がおすすめてくれるだけのことはある。

凍ったカクテルを夢中で食べていた華は、ふと外山との距離が近いことに気づいた。

熱心にシャーベット状のカクテルを食べていた華をじつと見つめ、外山が目を細めて言った。

「ご実家近くに帰って来いって言われたんですか？」

「いえ……」

華はまた首を振る。なぜ外山はこの話を気にするのだろう。

話題を変えたいと思いつつ、溶けかけたカクテルを勢いよく飲み干した時、察してくれたのか外山が言った。

「次、何か頼みますか？」

追及されなかったことに、ホツとした華はメニューを見た。やはりカクテルのことはよくわからない。悩む様子を見かねた外山が身を乗り出して、華が手にしているメニューを覗き込んでくる。

「これなんかどうですか」

ふわりと外山からいい香りがする。お酒のせいなのか外山に接近したせいなのかわからないが、ドキドキが加速して止まらない。落ち着こうと外山の指先が示しているお酒の名前を見る。

「ジャック・ローズってどんなお酒ですか？」

「カルヴァドスベースのカクテルです。リンゴのブランデーのことなんですが、ご存知ですか？」

「いえ、初めて聞きました。リンゴのブランデー……ですか？ 飲んだことがないからそれにしようかな……」

どんな味がするのだろうかと思いつつ、華はちらりと腕時計を見た。

——もう十時か……時間が経つのがあつという間……

あと一時間くらいでこの夢のような時間も終わるんだな、と思うと少し残念に感じる。その時ふと、一番大事なことを思い出した。

「そうだ、外山さん、今日はおみやげありがとうございました」

華が姿勢を正して頭を下げると、外山が笑顔で言った。

「いいえ、大したものじゃなくてすみません」

「そんなことないです」

華は首を横に振る。外山が、会社を辞める自分をこんなふう気遣ってくれるとは思わなくて嬉しかった。そのことはちゃんとっておかねばならない。

「あの……私、外山さんに、今までいろいろと気にかけてもらえて嬉しかったです。今日のおみやげも本当に嬉しかったです」

ちよつと酔っているかもしれない。そう思いながら、華は言葉を続けた。

「外山さんって、いつも、事務の私にまで声掛けてくれましたよ。外山さんはいろいろすごい

んだから、もつと威張ってもいいのに……なのに、常に優しくしてくれて……余裕があるというか、そういうところが素敵だな、って。えつと、うまく言えなくてすみません」

外山の他にも成績のいい営業マンはいるが、外山のように常に落ち着き払っている人は、ほとんどいない。

華は、外山の一番すごいところは『人並み外れた余裕』だと常々思っていた。今日出張帰りに華の送別会に来てくれたのもその余裕の表れだと思う。けれど、本人を目の前にするとなかなかうまく伝えられないものだ。

「そうですか。余裕があるように見えますかね。そうでもないけどな」

「いいえ、部長なんていつも外山さんがいないところで『外山は余裕そうだから、もつと仕事振ろう』っておっしゃってましたし」

外山がその言葉に噴き出し、カクテルをひと口飲んで華に言う。

「本当ですか。参ったな」

おかしそうに笑う外山につられ、華までなんだか楽しくなってしまった。

「部長って、外山さんのこと、すごくお気に入りですよ」

「いいえ。部長と俺は、伊東さんが入社してくる前はケンカしまくりでしたよ。どうして俺だけこんなに難しいクレーマー顧客を押しつけられるんですか！ って、フロアで怒鳴り合いをしたこともありますし」

「嘘……!!」

「嘘じゃないです。今思えば俺を育てようとしてくれてたんだと思いますけどね。うちの部ではそれ以来笑い話のネタになってます。聞いたことなかったですか？」

「いつも冷静沈着な外山が会社で怒るなんて想像もつかない。」

「聞いたことないです。本当なんですか？」

「俺もガキでしたから。この会社に入社して半年くらい経った頃かなあ。途中から話がズレてきて、挙句に部長がブチ切れて、いつも机に置いてある、あの変なぬいぐるみを投げつけてきて」

たしかに部長の机の上には、彼が応援している球団のマスコットのぬいぐるみが置いてある。静かなバーの雰囲気を使い、声を殺して笑ったせいかわ、華は咳き込みそうになってしまった。

「でも今は部長と仲がいいようにしか見えません」

「まあ、俺も大人になりましたし」

すました顔で外山が言うので、華はまた笑ってしまっただ。さつきまでは緊張で身体が痛いくらいだったのに、笑ったおかげですっかりほぐれたようだ。

机に置いてあるぬいぐるみが可愛らしくて部長には不釣り合いだとか、外山が全社表彰で社長賞をもらった時、スピーチが短すぎて司会者にもっとしゃべるよう言われ、仕方なく実家で飼っている猫の話をして大笑いされた話などをしているうち、すっかり時間が経っていた。

どの話も、外山の巧みな話術にかかるとおかしくてたまらない。

留学がダメになってから、久しぶりにたくさん笑った気がする。

——ここに連れて来てもらって良かった。外山さんってこんなに楽しい人だったんだな。

微笑みを浮かべる華に、外山が言った。

「俺は伊東さんのこと、一番若いのに頼りになる人だなんて思っていましたよ。どんな無茶振りされても笑顔でこなしてるし、仕事もほぼミスしないし」

「そうですか？　そうかなあ……」

「機嫌の悪い営業担当にキツく当たられても、いつもさらっと受け流していますしね。あれは大したものです。他の女子社員なんかよく泣き言言ってるじゃないですか」

そう言われ、外山はそんなところまで見ていたのか、と内心ちよつと驚く。

営業マンは時間に追われていることが多くて、イライラしてしまうのだろう。

だから華は、気にしすぎないようにしているのだ。それに幼い頃から気の強い兄と姉に振り回されてきたので、理不尽さに慣れているのかもしれない。

「芯が強いのはいいことですよ。俺は、伊東さんの折れないところがいいなと常々思ってるから」

「ほめすぎですって、外山さん」

華は笑顔で小さく首を振った。

——ホントは全然強くないんです。武史と一緒にフロアで働くことが嫌になって、会社を辞めるんですから……。でも、こうやってほめてもらうとすごく嬉しい。外山さんっておだて上手だな……

話が弾むのに任せ、気づけば、華はかなりの量のお酒を飲んでた。

身体が火照り、ふわふわする。そんなにお酒に弱いほうではないが、カクテルというのは存外にアルコール度数が高いものなのかもしれない。

それに酔いがまわっているせいか、どんどん口が軽くなっていく気がする。気が緩んでしまつて、ふと気づけば、華は普段なら言わないようなプライベートの愚痴まで、外山に話してしまつていた。

「この先地元に戻つたらお見合い結婚をさせられるので……私、兄と姉がいるんですけど、二人とも二十代前半で地元の人と結婚しているから、『お前も兄さんたちみたいに身を固める』つて親がすぐくうるさいんです。だから、実家の近くに住むの嫌なんですよね」

「伊東さんつてまだ二十三ですよ。結婚にはちよつと早くないですか？」

「ウチの親にとつてはそれが普通なんですよ。私は嫌なんですよ」

実家の両親は……特に母は、子供たちを早く結婚させたいと考えるタイプだ。そのお陰で華は、子供の頃から『いいところにお嫁に行けるように』と家事やお行儀を厳しく躾けられてきた。

だが、華は早く結婚したいと思つていないし、お見合いもしたくない。

親の言う『地元の人と夫婦になって、それぞれの実家のそばで暮らすのが幸せ』という考え方には賛同できないのだ。結婚するなら好きな人になりたいし、可能なら東京で暮らしたい。

「そうなんですか……結婚ね……」

外山は真顔で考え込んでいる。

——どうでもいい話しちやつたかな。外山さん、返事に困つてみたい。

話を变えようと思つた瞬間、外山が尋ねる。

「そういえば伊東さんは、なんで留学の後は地元に戻るんですか。そんなにお見合いを嫌がつているのに」

また先ほどの話題に戻つてしまった。隠そうかと思つたが、どうせ外山は明日からは別の世界で生きてゆく人だ。このひどい経験も、外山がいっぱい笑わせてくれたようにいつか笑い話にしたい。そう思つた華はつい本当のことを口にしてしまった。

「ホントは、留学行けなくなつちやつたんです。……業者に費用を払つた後、倒産したうえ、社長がお金を持ち逃げして」

「は？」

外山が珍しく鋭い声を上げて絶句する。外山のこんな驚いた表情は初めて見るな、と思いつつ、華は少しためらつて、正直に答えた。

「だから、私、明日から人生切り直しなんです。元からけつこうギリギリの計画で、寮費も食費も込みの語学学校に行くプランだったんですけど……日本に帰ってきたらちょうど冬なので、そのままスキー場で住み込みのバイトをしてお金貯めて、また新しく仕事を探そうかと思つてたくらいで。資金も余裕がなくなつたんですよ」

惨めな話をしていたら、武史にひどい振られ方をして、もう同じ会社にいたくないと思つた時のショックが、ありありとよみがえつてきた。

少し時間が経つた今なら、武史には大事にされていないことがわかる。

あの数ヶ月にも満たない交際の中で、どれだけお互いの心を通わせたことがあっただろうか。仕事を頑張っているところを評価してもらって、好きだと言ってくれて嬉しかった気持ちは嘘ではない。だが、武史にとっては、その告白の言葉さえ、思いつきで言ったにすぎず、気持ちなんてこもってなかったのだ。だからこそ、あんなにあっさり華を捨てたのだろう。

——ダメ。今はせっかくだけ楽しく過ごしてらんだから、あんな人のことを考えるのはやめよう。華は沈み込んでゆく気持ちを振り切り、顔を上げて笑ってみせた。

「そのことは会社に相談したんですか？ そんな事情があるなら退職を撤回できたかもしれない。辞めると聞いて正直、俺は驚いたんですが……」

真剣な外山の問いを、華は否定で返す。

「いいえ。ちょうど会社は辞めたいなと思っていたので」「どうして?」

華は口をつぐむ。武史の話はしたくなかった。少なくとも、憧れの人に聞かせたい話ではない。だが、下手に話を作っても、頭のいい外山には見抜かれてしまう気がする。

華は手元のマティーニを飲み干して、不自然なほど明るい声で言った。

「ないですよ！ すみません。つまらない話して。私の話なんかより、せっかくだけ素敵などころに連れて来ていただいたからもっと楽しい話したいな」

じわじわとこみ上げてくる薄暗い気持ちを振り払おうとしたけれど、なんだかうまく笑えない。アルコールのせいかな、頭の芯がぼんやりしてきてネガティブな本音が漏れ出してしまう。

「明日から始まる、どん底な現実を忘れたいです、私」

恋人もいない、留学もできない、お金もない、東京にもいられない……ないないづくしの人生が待っていることを少しでもいいから忘れたい。

忘れてどうなるというわけでもないけれど、せめて今くらいは楽しく過ごしたいのだ。

「現実を忘れたい……ですか?」

外山の不思議そうな声に、華は深々とうなずいた。

「はい。あ、でも今はすごく楽しいです。こんなカッコいいお店に連れて来ていただいて嬉しいし、外山さんみたいな素敵なたくさんお話できて、夢みたいな気分なので」

「夢みたいって……俺と一緒に飯食ったりしゃべったりしたこと、何度もあるでしょう？ 他人行儀なこと言わないでください。俺としてはけっこう勇気出して誘っていたんですけど」

勇気って、どういう意味だろう……華はふわふわする頭で外山の言葉の意味を考えながら話を続けた。

「でも、今日みたいな日に声を掛けてもらったのが、個人的にありがたくて。私、あんまり一人になりたくない気分だったから」

——どん底にいいことをつかの間忘れられるくらい楽しませてもらえて、本当に感謝してる。

そう心の中で付け加えて、華はじつと自分に視線を注いでいる外山から目をそらした。

グラスに口をつけようとして、そういえばもう飲み干してしまったのだと思出す。

——ダメだ、私かなり酔ってるかも……

さつきから、相当外山に気を許してしまって、しゃべりすぎている気がする。華はグラスを置いて深呼吸した。少し酔いを冷ましたほうがいいかもしれない、そう思った時、グラスに手をかけていた華の手に、外山の大きな手のひらが重なった。驚いて華は傍らかたわの外山を見上げる。

引き締まった外山の喉元が、かすかに上下するのが見えた。

——外山さん、どうしたの？

彼の視線は華にしつかりと向けられている。射貫いぬかれるような眼差しで、華は動けなくなってしまう。

「一人になりたくない、ね」

考え込んでいた外山が呟く。

包み込まれるように手を握られたまま、華は呆然と外山の整った顔を見つめた。

「えっと……はい……今日くらいは誰かと一緒にいたいな、って」

ぎこちなく答えた瞬間、外山の手の熱さを意識し、華の心臓がどくと音を立てた。

「じゃあ俺が、もう少しお付き合いしましょうか」

無表情に華の話聞いていた外山が、かすかに笑みを浮かべた。

反則的なくらい魅惑的な笑顔に、鼓動が苦しいほど高まる。

「それとも、俺が相手じゃ嫌かな」

突然何を言い出すのだろう。彼の意味ありげな言葉に反応できず、華は言葉を失った。

巧みに他の客の視線から隔絶されたこの席が、急に逃げ場のない檻おびのように感じられてくる。

「あの……」

「嫌なら、今の発言は撤回します」

そう言いながらも、外山は華の手を離そうとしなかった。

——嫌じゃないんだけど……でも……

ためらって目を伏せた華に、不意に外山が身体を寄せてきた。

たくましい身体が華に覆いかぶさり、抗あがう間もなく軽々と唇を奪われる。

——あっ、何!?

慣れたしぐさ、余裕に満ちたキスに華はめまいがしそうになった。

お酒の匂いと、外山のまとっている爽さわやかな匂いが華の身体を包み込む。

唇を重ねたまま、華はぎゅっと目をつぶった。

伝わってくる外山の体温が、華の知らない大人の世界の入り口のように感じる。

大きな手に手首をつかまれたまま、華は彼の舌先を受け入れた。

かすかに唇を開いた華の反応に満足したのか、外山がゆっくりと唇を離れた。

「……行きましようか」

外山が、華の耳元で囁く。その低い声がぞくりと肌を震わせる。

華は引き込まれるように、自然とうなずいてしまっていた。

普段なら絶対に、こんなことはしないのに……

——こ、これは。たしかに現実を忘れてしまいそう……

あまりの展開に、華の酔いはすーっと冷めてしまった。

外山に連れてこられたのは、バーと同じホテルにある部屋だ。ここしか空いていなかったと外山は言うが、まさかこんなすごい部屋を取ってしまうとは思わなかった。

華は半ば呆然としながら、豪華絢爛なホテルのエグゼクティブ・スイートの部屋を見回した。

三十六階の部屋からはさっきのバーと同様に、東京の夜景が一望できる。

しばらくぼんやり佇んでいた華は、外山に『コンビニに行ってくるから、その間にシャワーを使つて』と言われたことを思い出し、シャワーブースの扉を開けた。

中はピカピカに磨き上げられ、いつか使ってみたかった高級ブランドのアメニティが並んでいる。華は服を脱いでたため、シャワーのコックをひねった。驚くほどいい香りのシャンプーやボディソープで身体を洗い、髪を適度に乾かして、置いてあるバスローブを羽織る。とてもふかふかだ。それから改めて、豪華な室内を見回す。置かれたお茶を見つけ思わず心が弾んだ。

——これなんだろう？ ハーブティーかな……あ、すごい、イギリスの紅茶もある！

「何してるんです？」

お茶を一つ一つ手にとって見比べている時に突然声を掛けられ、華はハツとして振り返った。

いつの間に戻ってきたのだろうか。ビニール袋を手にした外山が、柵の上を覗き込んでいる華を不思議そうに見ていた。

「おかえりなさい。コンビニ遠かったですね」

なるべく落ち着いた口調で、華は答えた。だが外山の端整な顔を見ると、じわじわと緊張が高まってくる。

「少し離れた場所にありましたので」

いつもどおりの冷静な口調でそう言った外山が、袋からいろいろな飲み物を取り出した。

「伊東さんが飲みたいものがわからなかったの、いくつか買ってきました」

そう言つて、外山は残りのものが入ったコンビニの袋をベッドサイドのテーブルに置いた。

「ありがとうございます」

華はお礼を言い、バッグから財布を取り出した。バーではご馳走になってしまったので、飲み物までもらつては申し訳ないと思う。

「いえ、いりません。シャワーを浴びてきます」

脱いだジャケツトを手に、外山が部屋から出て行った。

——またご馳走になっちゃったな……何から何まで至れりつくせりだ。いろいろご馳走してもらう一方なのは、なんだか落ち着かない。

華は外山が買ってきてくれた飲み物の中から、スムージーを選んで口をつけた。残りは部屋の冷

蔵庫に片付ける。

夜景を見ながらぼんやりそれを飲んでると、夢の国にいるような気分になってきた。

——椅子もふかふか。いいなあこの椅子。

全部飲み終えた華はため息をつく。

正直に言うと、今回の件で外山のことをちよつと変わった男だと感じた。彼ならば華のような普通のOLではなく、もつときれいな女性を選べるだろうに、なぜ一夜の相手に華を選ぼうなどと思つたのだろう。

——私とは明日から会わなくていいから、後腐れがないと思つたのかもしれない。
なんとなく自分の考えに納得する。

華はリラックステアアから立ち上がり、デスクの前の回転椅子に座ってくるくると回つてみた。実は、回転椅子が子供の頃から好きなのだ。さすが高級ホテルの椅子はよく回る……などと思つていたら、シャワーブースから出てきたバスローブ姿の外山と目が合ってしまった。

「何してるんですか？」

「す、すみません……こんなすごいホテル……珍しくて……」

赤くなりながら、小さな声で華は謝つた。さつきから外山には妙なところばかり見られている。お茶をごそごそ探つていたり、椅子に乗ってくるくる回つていたり。

「伊東さんは可愛いですね」

外山がさらつと言い、うつむいていた華の頬に長い指で触れた。

「何を言ってるんですか、外山さんってば」

頬に血が集まるのを感じる。雰囲気を感じ上げるために甘いことを言っているだけだとわかつているのだが、恥ずかしくてたまらない。

「……俺、何か変なことを言つたかな」

華の顎を優しく持ち上げ、外山が整つた顔を近づける。普段はきつちりと整えている短い髪が濡れて乱れているのが、華の目に新鮮に映つた。

「伊東さんは俺のこと、嫌いではないですか？」

外山の黒い目に覗き込まれ、華は首を横に振つて震え声で答えた。

「き、嫌いだったら、ついでこないです、よ……？」

距離が近すぎる。だんだん鼓動が激しくなつてきて、華はぎゅつと目を閉じた。
緊張しすぎて苦しくて、外山の目を見ていられない。

「なら良かった」

低い声で呟いた外山がさらにぐいと近づき、華の唇を唇で塞ぐ。何が『良かった』のかと、尋ねる間もなかった。シャワーを浴びたばかりだからだろうか。外山の唇はほんのりと水の味がした。

椅子に座つたままの華は手首を大きな手につかまれ、抵抗できなくなる。唇が離れたかと思うと、外山の腕が今度は腰に回つて、軽々と抱き上げられてしまつていた。

「嫌がられていないなら、俺も遠慮せずにすむな」

たくましい腕の中でもう一度キスをされ、華の身体から力が抜けてゆく。武史とは比べものにな

らないくらいの力強さだ。これが大人の男の身体なのか、と思った瞬間、身体の芯がゾクリと震える。

優しくベッドに横たえられて、華はシーツを握りしめた。

外山が華の頬をそっと引き寄せ、再び唇を奪った。

——こういう行きずりみたいな関係の場合は、キスは絶対しないって人もいるらしいけど、外山さんはしたいほうなのかな……？

ためらいを覚えつつ、華は少しだけ唇を開けてそのキスに応えた。執拗じつように感じるくらい情熱的なキスに、華は小さく身じろぎする。

外山の大きな手が迷うことなくバスローブの腰紐にかかり、ゆっくりとそれを解いた。

やはりいざとなると怖おそじ気づいて身体が強張こわばってしまふ。華は引きつった顔を見られないため下に向け、かすかに震える腕で外山のバスローブの袖をつかんだ。大丈夫だというように、外山がそっと華の湿った髪を撫でてくれる。本当は怖くてたまらないことを、外山に見透かされているようだ。

外山の手で腕がされたバスローブが、肌の上を滑り落ちていく。彼は手を伸ばし、ベッドサイドのスイッチで部屋の明かりを落とす。

華は淡い明かりに満たされたベッドの上で、胸を両手で隠したまま身体を固くしていた。

「力を抜いてください」

外山が呟くように言っつて、そっと額ひたいを撫でてくれる。とても紳士的な触れ方だ。

「触っていいですか」

「はっ、はい、どうぞ……」

間の抜けた返事をしてしまったと思う間もなく、外山の指が、華の足の間に滑りこんだ。二本に揃えた指が、華の固く閉じた花芯を柔らかく弄もよほぶ。

「や、あ……！」

下腹に強い搔痒感かゆみが走る。甘ったるい声を上げそうになり、華は慌てて言った。

「っ、手が汚れますから、あの」

すると外山が華のむき出しの下腹部をもう一方の手のひらで愛撫しながら耳元みみもとで囁ささやいた。

「ほぐさないと、痛いと思いますよ」

「私、別に、痛くても大丈夫……んっ」

静かに、とても言うかのように、華の唇が塞ふさがれた。僅かな光に浮かび上がる冷静な表情とは裏腹に、蕩とうけるほど優しいキスだ。

思わず外山にそのまま身を任せそうになり、華は気づかれないようにぎゅっとシーツをつかんだ。こんなに簡単に気を許してしまいうるなんて、どうかしている。

外山の言葉どおり、ほぐすように指が華の蓄つぼみの奥にゆっくりと押し入っていく。

華はかすかに腰を浮かして、声を漏らした。

「ん……ふ……」

「痛くないですか？」

穏やかに聞かれ、華はつい素直にうなずいてしまった。

外山の指が、完全にぬかるみに沈み込むと、別の指で巧みに小さな芽を擦られて、得体のしれない熱が下腹部に蓄積されてゆく。

「……っ、あ、ああっ」

外山のたくましい肩をつかみ、華は乱れそうになる呼吸を必死でこらえた。

「まだきついですね。もう少し、指でしましうか」

「やあ……っ、も、大丈夫……っ」

開かれた足の間に外山の身体があるので、足を閉じることできない。華は必死で声をこらえ、膝を震わせて指先で弄ばれる時間をやりすぎす。

やがて足の間から温い蜜がわきだした。その蜜が外山の指に絡まって、はしたない水音を立てているのがかすかに聞こえる。

「あ、あぁ……やあ……っ……と、やま、さん、っ」

こんなふうに丁寧に責め立てられたら、おかしくなりそうだ。

「っ、もう、やめ……」

情けない声が出てしまった。華は外山にしがみついたまま、小さい声で懇願する。

「好きにして、いいから、ゆ、指、やめ……」

「俺は今、好きなようにしてるんですよ」

外山が耳元で囁いた。下腹部を触っていたもう片方の腕が、優しく華の腰を抱き寄せる。華の長

い髪に頬をすり寄せ、外山が言った。

「伊東さんは、髪も肌も本当にきれいですね」

しみじみとした口調に、華は涙ぐんだまま首を少しだけ横に振った。

「な、何……言って……」

ぬちゃ、というひとときわ大きな音を立てて、外山が中で指をかき回した。華は再び腰を浮かしそ
うになる。

「っあ、ダメ、外山さぁ……ッ」

外山の指がひくつく花鬘を何度も擦り、さらに奥へ忍び込んでゆく。身体を甘く責め立てる指か
ら、そして自分の身体が立てる淫らな音から逃れようと、華は必死で腰を引いた。

「お願い、もう、指、ヤダぁ……っ……」

ぬるりと媚壁を擦る指の感覚に耐えられなくなり、華は涙ぐんだままイヤイヤと首を振った。

「や、あぁ、ッ、もう、恥ずかし……っ、指、やあ……ッ」

身体を揺るたびに、まわりつくような水音が聞こえる。

その音が自分から聞こえているのだと思うと羞恥でどうにかなりそうだ。

「もうそろそろ、いいかな」

華の中を行き来していた指がずる、と抜かれた。外山はさつき持ってきたコンビニの袋から避妊
具を取り出して、口でその端を咥えてパッケージを引き破る。

「っ、ふ」

流れ出した涙を隠そうと、華は腕を上げて必死で手の甲で顔を覆った。

「泣かないで」

「な、泣いて、な……」

華の精いっぱい虚勢に、外山がかすかに喉を鳴らして笑った。そして涙目で唇を噛んだ華に軽くキスをして、濡れそぼった蜜口に硬くなった先端をあてがう。

「挿れますね、痛かったら言ってください」

硬く大きな茎が、じゅぶじゅぶという音とともに、圧倒的な存在感を伴って華の中に埋まってゆく。華は思わず身体を振って、喘ぎ声を漏らした。

「あ、あーっ……なんか、おつき……っ」

当惑と同時に、甘い疼きが身体の中を走り抜ける。開かれた足から、どんだん力が抜けていく。

「このまま俺につかまっていいですよ」

華の腰をさらに抱き寄せながら、外山が優しく言った。

熱い塊が、耐えがたいほどの圧迫感で華の下腹部を押し広げていく。

気づけば華は汗だくになって、外山の身体にすがりついていた。むき出しの乳房が彼の胸板で押しつぶされ、先端がその刺激で尖り始める。

「っ、うう、っ……外山、さん、あの、……っ」

「もうこんなに濡れてる。可愛いですね、素直な身体で……もう少し、挿れますね」

華の首筋に頬ずりしながら、外山が言った。

——ま、まだ奥まで入ってないの、嘘……

肉杭が蜜袋に擦れる生々しい音が華の耳に届く。中がきつくて限界かも、と思った瞬間、外山が華の耳元で囁いた。

「全部入りましたよ。どうですか」

「ああ、だ、大丈夫……で、す、っ」

蜜壺が彼のモノでいっぱい満たされ、華はぎゅっと目をつぶった。

「軽く動いてみますね」

中がぎちぎちで、裂けてしまいそうで怖い。だが、たつぷりと潤み始めた内壁が、焦らすように抽送を繰り返す外山の動きを助けている。

今までこんなに濡れたことがあっただろうか。自分の身体の変化に戸惑い、華は思わず声を上げた。

「あ、あ……っ、やあ……!!」

みっちりと彼を受け入れた身体の中が熱い。外山が動くたびに抑えようとしても声が漏れ、華は必死に自分を叱咤した。

——こんな声、出しちゃダメだっば……

そうは思うものの、与えられる刺激が強すぎて、どうすることもできない。

だんだん、思考がとぎれとぎれになっていく。

「っ、あ、あ、外山……さ……」

肌が擦れ合うとお互い糸まとわぬ姿なのだと思知らされて、恥ずかしくてたまらない。なのに、くちゅりという音が聞こえるたび、お腹の奥の疼きが止まらなくなってしまふ。

「気持ちいいですか？」

華の身体を氣遣っているのか、ゆったりとした抽送を繰り返しながら、外山が尋ねた。

「あ、っ、あ……の……」

華の身体の奥が、不意に、熱く昂った外山のモノでぐいと突き上げられる。

「ひゅ、っ」

花芯の最奥をえぐられる快感に思わず身体が跳ね、弾けるように乳房が揺れた。華は仰け反って外山の二の腕を握りしめる。

その反応を良しと見たのか、外山が華の足を限界まで大きく広げさせ、何度も奥を突き上げた。グチュグチュというあられもない音が響き渡り、ますます羞恥心が高まっていく。

「こうされると、気持ちいいですか？」

「っ、あ、べ、別、に」

「こんなエロい音を立ててるのに、そうでもないんですか？」

意地の悪い言葉に、華の目にまた涙がにじんだ。素直に答えないと許してもらえなさそう。

「……っ、気持ちいい……です……」

ようやく絞り出した言葉と同時に、華の目からぼろりと涙がこぼれ落ちる。

クス、と笑い声が聞こえた気がした。そして華の唇が、外山の唇で優しく塞がれる。

華は外山の背中に腕を回し、もう一度すがりついた。抱きかかえるような体勢に変わると同時に、今度は剛直したモノで優しく小さな芽を擦られて、耐えがたいほどの快感が走る。

「っ、やああっ、や、ヤダ、ダメ、そんなとこ……ダメ……っ」

外山の唇を振りほどき、華は潤んだ視界のまま訴えた。

「う、う……」

身体を翻弄されて、涙がとめどなくあふれてくる。ぼろぼろ涙を流して泣いている華の唇に執拗なキスを繰り返しながら、外山がため息のような声で呟いた。

「俺も気持ちいいです、なんだか、本当に……貴方が可愛くて」

耳元で囁かれた瞬間、再び外山のモノが奥へと入り込み、華の蜜壁がぞわりと蠢く。気づけば華は自分から小さく腰を振っていた。恥ずかしいからこんな真似をしたくないのに、身体が勝手に動いてしまふ。

「あ、あ……っ、あ……」

ねだるような細い声に煽られたのか、外山がさらに強く華の身体を抱き寄せる。

「さっきよりいい声になりましたね、伊東さん。俺……どうにかなりそうだ」

そう呟き、外山の手が華の乳房から腹、そして太ももにかけて楽しむようにゆつくりとすべり落ちていく。

「こんな身体をしていたら、朝まで俺に泣かされても文句は言えませんよ」

外山が華の腰を手でつかみ、容赦なく身体を動かす。どろどろに濡れた秘裂に、繰り返し昂った

剛直をねじ込まれる。

「っ、やあ、そこ、ヤダ、深い……っ……」

灼けた杭に何度も隘路を行き来され、閉じ合わさった肉襲を執拗に押し広げられて、華は唇を嚙んだ。これ以上乱れた姿を晒したくない。勝手に漏れてしまう声を聞かないで欲しい。

「もう、嫌……ヤダ……変になっちゃうから……っ……」

華の唇から、うわ言のように哀願の言葉がこぼれでる。

力の入らない身体を焦らすように突き上げていた外山が、汗のにじんだ顔で笑った。

「なんで嫌だなんて言うんですか、貴方だってまんざらでもなさそうなのに」

受け入れた彼のモノが華の中でますます硬く熱を帯びる。外山の熱で、身体の芯が炙られて、身も心も溶けてしまっただうにかなりそうだ。分厚い身体と絡み合いながら、華は吸いつくように外山の首筋に顔を埋めた。

「っ、ああ……っ、やア……っ」

「そんなに締めつけないでください。意外と食欲だな」

外山がそう言っ、ぎゅっと華の身体を抱きしめた。

「でも、こうやってが乱れる姿、悪くないです」

乳房が、外山の厚い胸板で押しつぶされる。

外山のなめらかな肌に包まれると、身体と身体の境目がなくなっていくような気がしてしまう。

「貴方の中、めちゃくちゃ熱い。今、そんなに、いいですか？」

「あ、あ、ちがっ……」

華はその言葉に抗おうと必死で首を振った。

「こんな状態で否定されると、逆にめちゃくちゃそられる……」

「なん……で……ヤダ……ああ……」

食欲とか、まんざらでもなさそうとか、外山が囁く言葉はどれも華の心情としては納得しがたい。

なのに、外山に貪られる身体は彼の言葉を肯定し、灼けるような愛撫を従順に受け入れている。

自分ではもうどうすることもできない甘い快樂に押し流されながら、華は汗だくの外山にすがりついたまま、意味をなさない喘ぎ声を漏らし続けた。

「あ、あ……っ、っ、っ……」

繰り返して激しく突き上げられて、花芯から身体の奥にかけてが、引き絞られるように疼く。

膝頭を震わせ、自分の指の背を嚙んでこらえたけれど、もう限界だった。

外山の汗が華の汗と交わって肌を濡らし続け、その発散される熱で全身を包みこまれるような感覚に襲われる。貫かれた身体の中がぐちゃぐちゃに蕩けてゆく。

さらに蜜があふれだし、華は力いっぱい外山にしがみついた。

「い、い……っ、あ、ああ……っ、も、イッちゃ……っ」

華の言葉に応えるように、外山が片腕で華の頭を抱き寄せる。

まるで恋人に対するかのような優しいしぐさだった。

大切に扱われているのが伝わってきて、二人の関係を勘違いしそうになってしまう。

灼けるような雄茎の熱を散々味わわされた媚肉が、ぎゅうつと強く収縮する。

「ッ、あああーっ！」

悲鳴を押し殺し、華は隙間なく外山と肌を合わせた。瞼の裏に、無数の星が散る。

「伊東さん、すみません、俺も……」

一瞬身体を強張らせた外山が、大きく息を乱して、華の一番奥を探り当てながら動く。

痙攣する蜜壺を味わうように動きを止め、外山は剛直を震わせて、ゆっくりと精を吐き出した。

「……っ、失礼」

外山は華の身体から、力を失った自身を引き抜くと、脱力している華を抱き寄せた。

汗ばんだ外山の胸に抱き寄せられたまま、華は弾んだ息を整える。

温かい大きな身体に寄り添っていると、気が緩んで強い睡魔に襲われた。

「大丈夫ですか？」

外山の問いかけに、華はこくりとうなずいた。

何か気の利いたことを言わなければと思うのだが、頭がぼうつとして何も思いつかない。

「もう泣いてないですよね？ ……顔を見せて」

大きな手で頬を支えられ、華は涙でグシャグシャの顔を上げた。こんな顔を見せるのは恥ずかしいのにとと思う。だが、奇異な目で見るどころか外山は微笑んでいた。見たことがないくらい、優しい表情をしている。

「失礼」

ティッシュで足の間を拭ってもらい、華はぼやけた視界でかろうじてお礼を言う。こんなことまでしてもらうなんて、とは思いますが、もう何をされても抵抗する気力もない。

外山が起き上がって、自分の身体の始末を始めた。華も起き上がろうとしたのだが、身体に力が入らない。口を開くのすらだるいくらいだ。

「冷えますから、これを着て」

さつき脱がされたバスローブを着せてもらい、華は目をつぶった。

「眠っていいですよ」

うとうとしかけた華の耳元で、外山が華の髪を手で愛しむように撫でながら囁いた。

「ありがとう……」

素直にそう答え、華はそのまま意識を手放した。

——あれ？ 武史泊まっていたの？ 珍しい。

寝ぼけた華は、男の腕の中で目を覚ました。人肌は気持ちいいな、と思ってもう一度目を閉じかけ、あることに気づいてパチッと目を開ける。大柄なたくましい身体は武史のものではない。

だいたい、武史とはもう別れているではないか。

状況を把握した華は布団の中で凍りついたまま、添い寝をしている男の顔をじっと見つめた。その端正な寝顔にしばらく見とれた後、サーツと血の気が引いていく。

——ああ。なぜこうなった……！

早朝明るくなったホテルの部屋を一瞥した瞬間、華の全身に冷や汗がにじんだ。人生初めての『行きずりの夜』がどうやら明けたようだ。

外山が目を覚ましたら、なんと挨拶をすればいいのだろうか。

——昨日はお疲れ様でしたって言えばいいのかな。ちよっと間が抜けてるかも。どうしよう。寝顔をうかがいながらじっとしていると、外山が気配に気づいたように目を覚ました。

「お、おはようございます」

「おはようございます」

外山がそう言うって手を伸ばし、縮こまっている華の頭を胸に抱き寄せ、髪を撫でた。

華は息を呑む。外山とベッドの中で密着して髪を撫でられているなんて、想像を絶する状況だ。

「伊東さんの髪の手触り好きだな、俺。シルクみたいできれいですよね」

やはり優しい声音だった。寝起きだが、機嫌はいいようだ。

「髪はずっと伸ばしてるんですか？ 初めて会った時からずいぶん伸びましたよね」

「伸ばしていると、それなりにまとまるから、美容院にこまめに行かなくてもいいので……」

——どうでもいいこと言っちゃったな……

思わず目をつぶった華の言葉に外山は笑って、そっと身体を離れた。

「なるほどね。ところで、シャワー浴びませんか？」

「お先にどうぞ、私は後で」

「一緒に行きましょう」

「あ、あのっ、お風呂一緒に入るのは、さすがに恥ずかしいんですけど」

「いいじゃないですか、今日くらい」

華は拳を口に当て、外山の言葉を反芻する。『今日くらい』とはどういう意味なのだろう。

奮発していいホテルに泊まった記念すべき日という意味だろうか。

「あれ？ もしかして今さら照れてるんですか」

からかうように言われ、華は反射的に首を振った。こんな情事に慣れていそうな彼に、お子様だと思われるのはちよっと癪だ。

「い、いえ、違います……」

だが、華の答えに、外山は口の端を吊り上げて笑っただけだった。余裕しゃくしゃくの態度だ。

外山の笑顔に怯んだ隙にベッドから引っ張りだされ、華はシャワーブースに連れ込まれてしまった。

「脱ぎましょうか」

華のバスローブに手をかけて、外山が言った。

「た、タオル、タオル……巻かせてっ」

「昨日見ましたよ」

「ダメですっ！」

慌ててタオルで身体の前を隠し、もう一枚を外山に差し出した。

「これ巻いてくださいっ、か、完全に裸なのはちよっと」

「わかりました」